

生活文化の再考 じかた 地方・じりき 地力の興隆を願って

千 葉 貢

はじめに

生活(life)とは生きるために行う営為の総称である。誕生から死に絶えるまでの諸活動である。衣食住をはじめとする生業、地域、人との関わりなどと共に繰り返されている。この諸活動の手段や条件はいずれも能動的にして、かつ受動的な創意工夫を伴いながら変遷し、これからも変わり得ること必然であり必定である。そして、「文化とは動物が遺伝的に獲得したものの以外のすべてであると考えているが、この文化の衣を通して人はいつも外界と相対して、⁽¹⁾生活と共に繰り返し、洗練されながら今日に至っている民俗習慣の数々である。すでに定型化したり定期化したりしている仕来たりという営為も含む。だから国宝や重要文化財と称する隔離されたものではない。身近に関わり合っているからこそ教養(culture, cultivateは耕やす)という自己形成力を育み、心を癒やす素材や礎となる。文化は地力を涵養し地方の独自性を醸成する。

1. 第三次近代化の時代 殖産興(工)業、商品消費経済中心の風潮から脱皮へ

今や「外発的」⁽²⁾な近代化(modernization)を反省し、「内発的」な近代化を志向すべき改革の時である。これまでの近代化は「富国強兵」の目的に集約され、「脱亜入欧」の風潮の下で西洋文明を流布させることで日本の開化を促し、対外的な国民主義(nationalism)が国力の増大に掻き立ててきた。日本の文明開化は資本主義の導入であり、工業化や産業化(industrialism)に等しいので生産と消費を絶えず繰り返すための条件づくりが焦眉の急とばかりに求められた。その条件を満たすための都市化(文明はcivilization, cityは都市・都会, civicは市民の、都市の)を煽り、文明開化を目指す後進国日本の急務であった。

都市は生産者と消費者の集合体なので、商品の大量生産と大量消費を可能にし、生存のための諸活動を支える経済(economy、節約)を合理的に効率的にと活性化してきた。ましてや資源が少なく、そのほとんどを輸入に依存する我が国に於ては、港湾を整備し大量の物資の輸送しやすい所を都市化させることが最も合理的で効率的な施策だったのである。ところが、皮肉なことに「近代化」の先駆けをなしてきた都市や工業地帯に於ていち早く「公害」(施策による必然性を証左したかのよう)を生み出し、「近代化」の矛盾を露呈しその陥穽に喘いでいる。さらには大量生産と大量消費の拡大に伴う無節操な大量廃棄にも行き詰まり、資源の枯渇はもとより、自然の

生態系や生物の環境を破壊するまでに至った。⁽³⁾ だからこそ、これまで便利、豊か、合理的、効率よく、スピード化、進歩、発展、開発（再開発）……などの真意を理解せずに偏愛偏重してきた「近代化」の風潮を改め、これまでのツケを払拭し、新しい観念や制度に基づく社会を構築すべき第三次近代化の時であり、ルネッサンス（Renaissance）や維新のために苦心、苦境、苦痛などを受容し、共苦や共死を共有する闘いを始めるべき「忍辱」⁽⁴⁾の時であると言いたい。

2. 循環型の社会や安穩な共同体の構築に向けて 相互扶助の励行、祭礼や共同作業の継承

都市化は近代化の象徴や結晶であり、すべての政策は試作品に等しい。その頭初より人、水、食糧の供給や廃棄物の処理などに至るまで、ことごとく農山漁村に依存しながら寄生虫のように拡大し、今やその調和を著しく害い共倒れの危機に瀕している。都市生活者と農山漁村在住者との共生や共存はもとより、物資（衣食住に関わるすべてのもの）の需要と供給が互いに循環するような構造や体制、そして観念を構築することが先決急務である。

地球のすべては共有である。共生や共存は共苦や共死を伴い、生命の継承や食物連鎖にとって必然であり、水の流れにも等しく栄枯盛衰を繰り返すことも必定である。命やものの再生産と存続継承は太陽の光りや熱の恩恵に浴しながら可能なことから、水、土壌、森林などと植物、動物などをも含めた生態系の保護と保全に努めることが生活の基本的な合理であり生命倫理（bioethics）の神髄である。だが、その理を以て非に落ちる人間の愚かさを思わずにいられない。

多くの先師はすでに循環させなければ継承し得ないこと、力を合わせて思いを一つにしなければ生存し得ないことなどを教示している。人ひとりで生まれることも生きることも出来ないのだから、互惠互譲、相互扶助の励行慣行、儀礼祭礼や共同作業などの継承は「共有の精神」や「生存の倫理」を具現するものであり、「大地の道德」に導かれるものである。太陽の必然や大地の生態に順応（⁽⁶⁾運命随順、⁽⁷⁾無為自然）することが人間の英知であり英断なのではなからうか。これまでの進歩、発展、合理化、効率化だけの「近代化」は、変化を強要強迫し蟻地獄におとし入れ自滅に到ること必定である。生きとし生けるもののすべてが生死、老若、盛衰、増減、陰陽などの「循環」によって継承し続けている「必然」を受容し、生命倫理に適った生き方や社会をつくることが「巨大な脳を獲得した人類にホモ・サピエンス（賢いヒト）のニックネームが与えられ」「サバンナで直立したとき、多くの動物からアンソロポー（見上げる）的存在になった」⁽⁸⁾という我々の責務なのではなからうか。

3. 生業と生活の一体化を目指して 生命倫理の確立、食物連鎖の熟知と共有

今日では農山漁村社会の現状や農林漁業（第一次産業）の実態を知らない、まして体験のない

人々の増加に伴い、食料（糧）がどのようにして生産され、野菜がどのように栽培されているのかも分からないという人が増えてきたのではないと思われる。食料（糧）は輸入できても農地や農山漁村の人々は輸入できない。食料（糧）を外注に依存し自給率が低下し続ければ地方が保持してきたその地域の培養力や醸成力、求心力などが衰退し、地方だけではなくそこで生まれ育つ人の地力もまた衰微する。過疎化に伴って地方の地力が低下すれば、国家の構成力や保持力もまた衰退し、国勢や国力もまた衰微する。それは個人の地力だけではなく、農地を休耕不耕化し、雑木林を宅地や工場用地、ゴルフ場、道路などに「開発」すれば、その土地の地力も低下し、再生は極めて困難になる。農地も含めて「森林は公共財の性格をもっており、単なる木材資源や観光資源として一面的な観点からだけで市場経済の論理にゆだねることができない⁽¹¹⁾」ので、国土の保全や食料（糧）の確保は国民の責務であり、後継者の育成と共に農山漁村の果たしている顕著な外部経済の効用を理解させる教育や啓蒙活動も急務である。

農山漁村の再生は、国はもとより各都道府県や市町村の存亡を賭けた施策として農林漁業従事者を育成する機関の設置と拡充、そして職業、職種に対する職人教育や啓蒙活動、実習は都市部に於ても必要不可欠である。小・中学生の長期休暇は体験学習の期間として都市部と農村部の子ども達とを交換学習、交換留学などの名称で定期的、恒常的に促進させることも求められる。「山村留学」や「山の家」「海の家」だけではなく「都会留学」「都市の家」も必要なのである。

大地は田畑の農地だけではないのだが、無闇に道路や宅地、工場用地、娯楽施設、大型店舗などの開発を避け、むしろ水を涵養したり土壌の浸食を防止したり、動物の糞をなし植物の繁殖を促す涵養林や保安林、休養林、あるいは身近な里山、鎮守の森、屋敷林、街路や自宅の庭などの樹木を積極的に補完したり保全したりすることもまた地力の増進をもたらすので、そうした取り組みへの共通認識の構築や制度づくりの改革、そして確立も切望される。

国土や地方の保全は人権の尊重と同様であり、その地力を育む上でも重要である。自国の地力によって栽培された食料（糧）が我々の血肉をつくり体力をも養う。食料（糧）は、耐久財とは異なり、毎日の消費財だけに出来るだけ身近なところから安全、安価、安定、新鮮な供給こそ基本的な欲求であり、産地の土壌や生産者の地力を養い、生産と消費の循環や再生をも可能にする。だが自由、平等、個性の尊重を謳いながら形骸化した議会制民主主義の名の下で念出された行政や政策というものが、かえってこれらを阻んでいるような気がしてならない。

4. 外部経済の重要性 すでにある「無用の用」や精神文化の尊重

私の希求する施策は未来に思いを致し、後代の人々がより良い社会生活を営まれることを願いながら創出されるべきもので、後顧の憂いは避けなければならない。過去に拘泥することでも未来にツケを残すことでもないのだが、多くの人事は過去を省みて悔いるからこそ未来を求める改善の階梯であり試みである。これまでの近代化の一環をなす開発、進歩、発展などに伴う獲得

の風潮(社会)を煽情してきたのは、無節制な進歩発展至上主義や可変的な物欲至上主義であり、物による自己満足感を抱きたがる強迫観念である。多様な機器による擬似的な万能感でもある。

「近代化」は無機質な物づくりのために「無用」を「有用」へと価値観の転換を強要し、有機的な感情や感覚の鈍化を促しながら素朴な利他愛に包まれている精霊崇拜主義や無常感などの古典的な心情を滅却させ、可変的な物の獲得にかまけているうちに利他愛も互惠互助の謙譲の精神も希薄化し、人に対する畏敬心も自然に対する畏怖心も喪失しつつある。もう敬虔な人間性を紡ぎ培うことは困難であり期待できなくなった。むしろ不満や不安を口走り、利害打算に固執する狡猾にして猜疑心の強い人間性を増殖している状況のような気がする。大島清は「手よりも足よりも最多の情報を脳に送り込む口腔(こうくう)感覚(食)の衰退が、ホモ・スツルツス(愚かなヒト)への転落に拍車をかけている」とし、「レトルト食品やファーストフードといったエサ的『食』に明け暮れる『世紀末の家畜化現象』からは、何としても脱出せねばならない。」とも述べ、⁽¹³⁾「モノで足をすくわれている」現代社会の精神的な荒廃ぶりを悲嘆している。

我々は今や遅しとばかりに無頓着な喪失や廃棄の風潮から、または喪失や廃棄の無自覚、無抵抗の時代を超克脱皮し、「いかに獲得し、どれだけ増強拡大するか」を得意な観念とするのではなく、「いかに喪失を少なく保持し、継承していくか」に心血を注ぐべきなのではなからうか。即ち、進歩や発展とは必ずしも増強拡大の変化を期するものではなく、むしろ変化しないものや普遍的な事などによって社会が維持継承され、人や地方の地力もまた涵養、醸成されてきたのだということを知るべきである。変化しない普遍的なもの 地球の自転(公転) 月の満ち欠け、昼と夜や水の循環、季節の輪廻転生、生と死、青春と老化、男と女、一日の時間などの絶対性を認識し、着る、眠る、食べることなどを日々繰り返してきた習慣を吟味すれば、我々にとって本当に必要な「モノ」と、その「モノ」の本質や必然、絶対性などの条件によって強制されているという真理に覚醒するのではなからうか。習慣は現実との身体的な接触によって洗練されてきたのだが、今や「職人氣質」の如く体で覚えるという肉体的な自己の確立や生活実感を喪失しつつある。

だから、我々はこれまでの「近代化」によって吹聴されてきた進歩、発展、開発、合理化、スピード化などの言葉が、地球や人間の絶対性を幻惑したり攪乱したりするための手段であったということに悟達すべきである。「近代化」によって太陽の惑星である地球が進歩発展しスピード化したわけでもない。満ち欠けを繰り返す月が合理化したり効率化したり、満天の星が開発されたわけでもない。むしろ「近代化」によって動植物の種が必要以上に急速に激減し、多くが絶滅の危機に瀕しているというのはどうしたことか。大気や地質、水質などが汚染され、「喘息」の児童生徒が増加し、⁽¹⁵⁾「環境ホルモン」によって体内が蝕まれているという事実をして、「近代化」と称する幻想が古典的にして伝統的な生活習慣をも破壊しつつあるのだということ看破し悔悟すべきなのである。生活習慣とは食べる、眠る、着るなどの動植物の必然的にして絶対的な機能や条件であり習性である。人間はホモ・サピエンス(賢いヒト)という「称号」を得て、多種多様なモノやコトを創出して「それみよ」とばかりに得意満面になってその能力を誇示しがちだが、

そのモノやコトは案外無益にして不要な長物であり、むしろ他の動植物を傷つけてしまうような自己中心的にして独善的なもの、他と複合化、一体化しにくいものなのではなからうか。「天に向けて唾を吐く」と同じように、「巨大な脳を獲得」してしまった人間（ホモ・サピエンス）の、思考し行動せずにはいられない強迫観念の具現であり悲しい宿業の証左なのかも知れない。だから、この行く末は誰もが予測予見できないだけに市場原理を是認し、自由、平等、個性の尊重を免罪符に、このまま傲慢さを増長させながら自滅に至る道を急いでいるのかも知れない。

5. 生活文化の再考 民俗・習慣・伝統の力に育まれて

1853年のペリー来航と共に動き始めたというこれまでの「近代化」を猛省悔悟し、今や遅しとばかりにもその事の本質や生きとし生けるものの必然、そして人間の絶対性などを認識することが急務である。社会を構築し自己を形成してきたのは、何代にも亘って洗練し継承されてきた民俗（folklore）の然らしめるところである。今は亡き多くの人々がその身心を挺して創りあげ伝えてきた民俗習慣の一つ一つによって我々の身も心も創られ安心立命の境地を得ているのである。その民俗習慣を具体的に体得する場所や場面が生活なのである。民俗習慣は日々の生活と共に実施され継承されてきた古典的な判断であり生活者の常識（common sense）である。またその地方や地域の共通観念の象徴や具象でもある。

民俗習慣とは芸能や儀礼祭礼、仕草などの活動だけではなく、道徳観倫理観、人や自然との接し方、言葉遣い、礼儀作法、天候の見方などなど、今日の学校教育では及びがたい全人教育の要素を秘めているのである。民俗習慣の数々は、軽佻浮薄な「近代化」の蔓延し、「近代的な自我の確立」や「個人的な人権の尊重」「思想・信条の自由」「教育の機会均等」などを口走る現代社会にあっては軽視され看過されがちであるが、我々の行動所作の原理や規範、思考の起因素因をなす観念として、深層心理として確かに息づいていることをしっかりと想起すべきである。しかし、日常案外無頓着である。それは自覚するまでもなく無意識のうちに判断したり反応したりしているほど血肉化してしまったという証左であろう。先賢の慧眼にして真理と思われる「習い性と成る」「雨垂れ石を穿つ」に等しい数々の民俗習慣こそが生活文化の具象なのである。

具体的な民俗習慣は人為的な働きかけよりも、その生業や環境、生態などによって規制されることが多い。生業を共にする地域社会の連帯や連携によって創出され、維持継承されてきたという共同体の象徴的な儀礼や祭礼もある。民俗習慣はその地域のなかで生き抜こうとしてきた人々の英知であり「生活の古典」⁽¹⁶⁾なのである。従って、民俗習慣の喪失は生活を単調化し^{じりき}地力を衰退させ、人々との関わり合いや連帯紐帯観を希薄化させるので人間性の変質や偏重をもたらす恐れもある。だから民俗習慣を継承するのは個人の生活を包んでいる^{じかた}地方や地域の責務であり使命である。生業から遊離してしまった民俗習慣を維持継承するには、民俗習慣に対する理解と意識的な取り組みが求められ、地域の人々による共同連帯の力、個人の記憶や行動力が伴う。机上で習

得する知識とは異なって、その地方や地域に息づいている多くの民俗習慣が生き抜く力とも言うべき地力^{じりき}を育成し、その保持や継承を担ってきたのである。

「近代化」の一環である「テレビ、ビデオ・ゲーム」を、小・中学生の子どもたちが深夜にまで及んで長時間視聴しては視力を低下させ、「疲れる」と言い「朝が弱い」と言い訳する。ウォークマンのイヤホーンを耳に当て続けて難聴を来たし、レトルト食品やファーストフードを食べる習慣をつけて「環境ホルモン」によって体内が冒されていくことが、どうして進歩発展であり豊かな生活と言えようか。身をもって進歩、発展、便利、スピードなどを吹聴してきた「近代化」の真意について熟考すべき機会を促し警告しているのである。蝕まれてしまった体を治療するのは病院だけでも、自覚症状のない潜在的な人々の予防や歪みの是正、あるいは心を癒やしてくれるのは、数々の民俗習慣に包まれた古典的な生活の営みであり古典的な習慣の受容なのである。即ち、テレビやビデオを見ながら“孤食”を食うのではなく、「人と人との触れ合いを前提とした『食』。瞑想（めいそう）し、対論に耳を傾け、食いものを通して自然のつづやきを聞き、イメージを脳裏に刻む。こうして育った人間こそ、自然に優しく、生命尊厳性を認知する『賢いヒト』⁽¹⁷⁾と言えるだろう。」という大島清の説明に共感するあまりに、私は「食」に加えて「民俗習慣」の大切さを強調しておきたいのである。最も「食」もまた「民俗習慣」であり生活の基本なのだから「賢いヒト」への道は同じ階梯である。

人ははじめから人なのではない。衣食住を含めた民俗習慣と触れ合い、抱かれながら「人」になっていくのである。その「人」を育ててきたのが生活文化であり、「生活の古典」と称される数々の民俗習慣である。その民俗習慣が地方や地力の興隆と拡充には不可欠な素材である。これまでの「近代化」の爛熟に伴う終末、転機を迎えている今こそ、新しい社会を担う人々の地力を育む上でも民俗習慣の復興と再生の意義や責務は多大である。やがてはこれまでの「近代化」によってもたらされた社会の矛盾や人間の歪みなどが淘汰払拭され、ホモ・サピエンス（賢い人）の「称号」に相応しい人間性を回復すると共に、地方の民俗習慣によって涵養されてきた素朴な地力^{じりき}を賦活再生し血肉の如く継承されていくに違いない。

（ちば みつぎ・高崎経済大学地域政策学部教授）

註

- (1) 佐野賢治・谷口貢・中込睦子・古家信平編1996『現代民俗学入門』（吉川弘文館）41頁、安室知「生態系と民俗技術」の章より引用。
- (2) 漱石は「現代日本の開化 明治44年8月和歌山に於て述」と題して講演し、そのなかに詳しいので参照して戴きたい。1996第1刷、1985第3刷『漱石全集』（岩波書店）第11巻333頁。
- (3) たとえば松永勝彦（北海道大学水産学部教授）は、1993『森が消えれば海も死ぬ 陸と海を結ぶ生態学』（講談社ブルーバックスB977）のなかで「磯焼け」の実態や要因について調査報告している。
- (4) 「忍辱^{じんじく}」については中村元監修1962初版、1967第2版『新・佛教辞典』（誠信書房）414頁に、「忍耐は『梵』クシャンティ（ksānti）の訳、忍辱と訳す』六波羅密（六度）・十波羅密の一。心をかき立てることなく、よく平静に保ち他から加えられる諸の苦惱・苦痛・侮辱等を耐え忍ぶことをいう。」とある。

- (5) 例えば、西行法師、安藤昌益、松尾芭蕉、宮沢賢治、唐木順三などを挙げておきたい。
- (6) 荘子は「知其不可奈何、而安之若命、徳之至也」(其の奈何ともすべからざるを知りて、これに安んじ命に若うは徳の至りなり)と述べている。1971初版、1994第36版『荘子 第1冊(内篇)』(岩波文庫)121頁、123頁より引用、かつ参照した。
- (7) 老子は「為無為、則無不治」(無為を為せば、則ち治まらざること無し)と述べている。1968初版、1969第3版『世界の名著4 老子荘子』(中央公論社)72頁上段から73頁上段にかけて引用、かつ参照した。
- (8) 大島清は「命の尊厳を知る“賢いヒト”」と題して述べていた。1994『読売新聞』(平成6年12月13日火曜日朝刊)のシリーズ「論点」より引用。
- (9) 1998(平成10年12月4日金曜日朝刊)『日本経済新聞』は「疲れる子供 長時間テレビ・ビデオ・ゲーム」「小中学生45%『普段から』」などという見出しを掲げて「文部省による『子供の体験活動調査』」の結果を報じていた。このなかで、「木登りや太陽が昇ったり沈んだりするところを見た経験が『何度もある』のは30%に満たなかった。」とも記されていた。
- (10) 農業への新規学卒就業者数はすでに二千人以下になってしまった。農業人口はすでに高齢化しているのだから、担い手の面からも日本の農業は窮地に立っていると言えよう。農林水産省、1994(平成6年度版)『農業白書』の附属統計表参照。
- (11) 波多野進1996『地域主義の経済学 新しい政策発想のすすめ』(実務教育出版)183頁。著者は注のなかで「水源涵養、国土保全、災害防止、自然保護、大気浄化などの機能を代替財の調達コストで評価すると、日本の森林評価は年間約39兆円(1991年)になるといわれる。」(185頁)と述べている。また、自動車の外部不経済を内部化し、「不便」さも認識する必要がある、とも述べている(188頁以下)。
- (12) 第17回参議院通常選挙は、1995年(平成7)年7月23日(日曜日)に投票された。「その投票率は全国規模で実施された国政選挙で初めて50%を割り、過去最低だった1992年参院選の50.72%をさらに6.20ポイント下回って44.52%(自治省発表)になった。」と平成7年7月24日(月曜日)の『朝日新聞』朝刊が報じていた。このような結果を踏まえて公職選挙法の一部改正に到ったのは周知の通りである。
- (13) 註(8)に同じ。
- (14) E・F・シューマッハー(小島慶三・酒井懋訳)1986第1版、1993第11刷『スモール・イズ・ビューティフル 人間中心の経済学』(講談社学術文庫)なかで「最高なるものの腐敗は最悪なり」という箴言とも警句とも思える意味深長な言葉を添えている(130頁)。
- (15) 1998(平成10年12月18日金曜日)の『日本経済新聞』(朝刊)は、「ぜんそくの子供急増」「過去最高の割合」「小学生では学級に1人」などという見出しを掲げて、「17日、文部省がまとめた『98年度の学校保健統計調査』によると、幼稚園から高校まで、いずれも過去最高の割合で、小学校では2.3%とほぼクラスに1人いる計算。」と報じていた。
- (16) 牧田茂1969初版、1972年第3版『生活の古典 民俗学入門』(角川選書16)のなかで、「民俗は民間の知識」だとして、「折口信夫先生がこれを“生活の古典”と呼ばれた」(15頁)と述べている。
- (17) 註(8)に同じ。

付記 本小考は、高崎経済大学地域政策学部主催による平成10年度第2回夏季研修講座(9月9日担当)にて講じた要旨に加筆したものである。